

感覚の言語形成における役割 (Ⅳ)

—— 2 女児の 0 才から 2 才 6 ヶ月までの
観察記録を中心として ——

一 谷 彊・須 田 洋 行

The Role of Sensory Systems on Language Formation (Ⅳ)

—— Developmental Approach to Two Babies from Birth
to 2;6 ——

Tsuyoshi ICHITANI and Hiroyuki SUDA

Received April 30, 1980.

I 問題と目的

言語形成の初期において感覚が重要な役割を担っているとする考え方がある（たとえば、Geschwind, 1965 a・b：星野，1970：須田・苧阪，1970：Scott & Sattel, 1972）が，それを研究する場合方法論上困難な点が多い。たとえば，Semantic Differential 法（以下 SD 法と略す）にしても，感覚を測定しているのか，それとも情緒的意味を測定しているのか，と言う論議がある。

須田（1975）は，Osgood（1962）の意味空間の主要因子は，われわれの感覚器官が外界を分割するその方法を表徴しているものと当初は期待していたが，受容様式よりも反応様式を反映していると考えerようになったと言う立場にたって，SD 法を用い，言語形成において感覚がどのような役割を担っているかを検討した。この場合，視覚に障害を持つ中学生盲児・弱視児，聴覚に障害を持つ中学生ろう児を対象とすることにより，中学生普通児と比較対比して，視覚・聴覚・触覚等が言語形成において果たす役割を考察した。その結果，種々の SD 尺度の因子分析により上記の 4 群とも Evaluation (E), Potency (P), Activity (A) の 3 因子を見だし，E 因子は主として内部（内臓）感覚に基づき，P 因子は聴覚に，A 因子は視覚にその感覚的基礎をおくのではないかと解釈した。この考えを証左するために，さらに概念の因子分析を行ない，視

覚・聴覚・触覚のいずれもが、言語形成に重要な役割を果たしていることを見いだした。

須田・一谷・苧阪（1979）は、須田（1975）の考えが小学生普通児・盲児・ろう児についても妥当するかどうかを検討した。この結果、3群ともE・P・Aの3因子を見いだした。これに基づいて考察がなされ、次のような結論に達した。すなわち、(1)SD法によって見いだされているE・P・A構造はE→P→A因子へと順次分化・発達するのではないか。そして、(2)E因子の感覚的基礎は内部（内臓）感覚・嗅覚・味覚に基づき、P・A因子の感覚的基礎は視覚優位の、あるいは聴覚優位の感覚の統合様式を持つ体性感覚に基づくのではないか。この考えを証左するために、さらに概念の因子分析を行ない、視覚・聴覚・触覚のいずれもが、言語形成に重要な役割を果たしていることを見いだした。

以上のように、視覚・聴覚・触覚・嗅覚等の各感覚が言語形成の初期において重要な役割を果たしていることが明らかにされたが、次に問題となるのは、身体運動感覚が特に動詞の習得において重要な役割を果たしているのではないかと言うことである。

須田・一谷（1980）は、身体運動感覚が特に動詞の習得において重要な役割を果たしているのではないかとする仮説のもとに次のような研究を試みた。まず、主に動作と関連が深いと考えられる動詞80語を選び、小学校2・4・6年生に熟知度を5段階評定させた。この評定結果に基づき、標準偏差・熟知度（％）が計算されて考察がなされた。この結果、以下の結論がなされた。すなわち、小学2年→4年と動詞の熟知度がCAとともに高くなる一方、小学校6年になると小学4年よりも熟知度の下がっている動詞があること。これらの動詞の標準偏差を見ると、4年よりも大きくなっている。このことは、小学校4年までは、動詞も動作と関連した具体的対象物で評定されているが、小学校6年になるとさらに分化されて抽象的な対象物をも判断するようになると結論された。

次に、各学年毎に相関係数が求められて考察がなされた。この結果、小学2年では「足の行為・手の行為」と言うような個々の具体的動作を示す動詞間の相関が高いが、小学4年を頂点として、小学6年になると、具体的動作から高次の抽象的概念へと発達分化して行くことが明らかとなった。

さらに、ThurstoneのCentroid法が適用されて因子分析が行なわれ、小学2・4・6年とも身体運動感覚因子が見いだされた。最後に単純構造を見出すために、varimax rotationが行なわれて考察がなされた。この結果、今までの考察を証左する結果が出た。つまり、小学2年では「手の行為・足の行為」と情動が深く関連しているが、高学年になるにつれて、これらの行為が複合された動詞の因子負荷量が高くなり、6年生になると「読む・聞く・書く」と言った抽象化された高次の概念へと発達・分化している。

以上の結果、低学年においては具体的動作と動詞の関連が深いことが明らかとなったが、今後の問題としては、乳幼児の発達過程において、どのように動詞を学習して行くかが、発達の・臨床的に検討されねばならないと考える。このため、本研究は出生直後から2才6ヶ月までの乳幼児の発達を観察することとした。

Ⅱ 方 法

1 観察対象児

M：出産時の状態 体重2,600g 身長50.0cm 胸囲29.5cm 頭囲30.0cm

R：出産時の状態 体重3,300g 身長51.0cm 胸囲32.0cm 頭囲35.0cm

MとRは長女と次女の関係にあり、妊娠中および出産時にもなんら異常はなかった。

2 観察の方法

観察の方法は次のように行なった。日中は筆者のひとりである須田が仕事のため家にいないので妻が記録を取った。また、その日の一日の様子を話し合う中で須田が重要と思われる事は記録するようにした。なお、土・日曜日は須田が在宅して記録を取った。また、Rの記録を取るときは、先入感が入るためMの記録は見ないこととした。

Ⅲ 観察の記録と結果の考察

記録の中には名詞などの発語の時期などもあるが、これらの研究は沢山あるため割愛した。したがって、本研究では動詞と動作の関連を中心に述べることとする。

M1 0；0（11）* 背のびをよくする。その都度声を発する。

24日目には健康診断に行き異常なく、体重 3,600g となる。25日目にはときどき甘えなきをするようになる。

M2 0；0（27） お乳を飲む時、母親の服を力強く握る。よく甘え泣きをし、抱くと泣きやむ。

R1 0；0（30） はっきりと物をじっと見るようになる。この頃、さかんに背のびをする。

M3 0；0（30） 指をしゃぶる。母乳がでない時は力強く離し、自分の指をくわえる。

R2 0；0（30） さかんに首をたてようとする。

R3 0；1（3） 指を口に持っていこうとする。

以上の観察は、いずれも遠城寺式分析の発達検査法（1977）（以下E式と略す）、および津守式（1961）（以下T式と略す）の結果とはほぼ一致する。

M4 0；1（7） 「Mちゃん」と呼ぶとにっこりする。抱くと足をつっぱる。首も自分で立てようとする。

M5 0；1（12） 手で握るオモチャをしっかりとにぎって長い間持っている。乳首をくわえさと自分の手をそえて長い間持っている。母親の声がわかり声のする方を見る。背中をそらす運動・足の運動が活発で、その都度声を発し、時々言葉らしき発音もある。

M6 0；1（17） 首のすわりがしっかりとする。

R4 0；1（23） 盛んに指をしゃぶる。あやすとよく笑ったり、話しかけるような声を発する。

M7 0；1（26） この頃右手の指をよくしゃぶる。

現在、M・Rとも右利きである。

R5 0；1（27） 抱くと足をよくはねて立とうとする。母親が両手でRの足を持って交互に曲げたり伸ばしたりして足の運動をさせるととても喜ぶ。

M8 0；1（29） ひとり言らしきもの（アー・ウー）を言って笑う。

（注） *M1 0；0（11） とはMの第1回目の観察事例で0才0か月の第11日目に観察された事例を示す。以下同様。

ここまでの観察結果のいずれも、T式・E式の2ヶ月の観察と合致する。すでに、手・足の運動がさかんに行なわれている事に注意されたい。

R6 0;2(0) 左右の手の指、特に親指を強く吸う。

M9 0;2(3) 左手の指をよくしゃぶる。

R7 0;2(3) 母親がベットの近くにいないと人を呼ぶ様な泣き方をする。腹ばいになると少し頭を持ち上げる。

M10 0;2(12) 身体全体を横に向けると声を出して喜ぶ。そして、腹ばいになろうとする。頭を少し上げる。

M11 0;2(13) 鏡に自分の顔が写ったのを見て笑う。テレビを長い間みる。たびたび指をなめる。時には両方の手の指を口へ入れる。泣いていても母親の声がするとすぐ泣きやみニコリとして「オー」と声を発する。横にしていると一人で寝返りをうつ。そして、首を長い間上げている。

R8 0;2(16) 顔（特にまゆげ）をよくしかめてむつかしい顔をするが、話しかけると一緒になって口を開けて話そうとする（アー・ウー）。もりのこかげで……、お馬の親子は……、などの歌を歌ってやると喜ぶ。

R9 0;2(20) 親指をよく吸う。

M12 0;2(28) オー・オー・ウー・ウー、ハー・ハー、の声を出す。腹ばいで長い間首を上げている。

M13 0;2(29) やかましいほどしゃべる。ときどき「ハーイ」と言う。親指を口に入れて強く吸う。ここで付言しておきたいことがある。つまり、このころには、両親のいずれか一方が「Mちゃん」と呼んだ後、「ハーイ」と言うようにしていた。それは意図的に言葉の働きかけをした場合、どのように反応するかを観察するためであった。しかし、以後は意図的な働きかけは一切しなかった。

M14 0;3(2) 両手におもちゃを持って遊ぶ。そのおもちゃを口に入れる。抱くと良くはねる。足がしっかりしてくる。

M15 0;3(5) 腹ばいで手と足を動かすが前に進まないために声を出して泣く。

R10 0;3(10) 首がしっかりとして抱きやすくなる。大きな声で母親を呼ぶ。遊んでやるとニコニコと機嫌が良い。

M16 0;3(14) 大きな声を出して笑う。父親・母親の声・顔の区別がはっきりとわかる。ミルクを飲む時、両手の指を乳首と一緒に入れる。乳首をかんで遊びながらミルクを飲む。「おててつないで……」と歌ってやると喜ぶ。腹ばいで少し動く。

R11 0;3(16) 腹ばいになると長い間、首をあげている。大声を出して笑う。「もしもしかめよ……」と歌ってやると喜ぶ。

R12 0;3(26) ケラケラと笑う。

M17 0;4(11) 人を見ると必ず笑って愛きょうが良い。腹ばいのまま後ずさりをする。背中・腰等がしっかりと少しの間は座ったり、こたつにもたれて立つ。

R13 0;4(17) 少しのあいだ一人で座れる。手に昆布・するめを持って口に入れてなめる。

R14 0;4(20) 口に物を持っていきたがり、思うようにならないとキャーキャーと泣く。遊

んで欲しいと激しく泣く。

M18 0;4(22) こたつに両手をかけて少しの間一人で立っている。

R15 0;4(26) おやつにウェハース等を自分で上手に持って食べる。首がしっかりとできて抱きやすい。人の言う事をじっと聞いている。

M19 0;4(28) 新聞をくしゃくしゃにして細かく破る。手に持った物は何んでも口に入れてなかなかはなさない。お乳を飲んでいる時、側で聞える音などに気が散ってなかなか飲もうとしない。

以上の観察結果は、いずれもT式・E式の結果と合致する。

R16 0;5(1) 鏡の中の自分の顔を見てケラケラと笑う。

M20 0;5(3) おもちゃを無理に取ると怒ったように泣く。

R17 0;5(13) 歩行器に喜んで乗る。

M21 0;5(13) 歩行器に乗せたら非常に喜んで後向きに部屋の中を少しづつまわる。

R18 0;5(23) リンゴ・ウインナー（8分の1位）を手に持たすとかじって食べる。母親が怒った口調で何か言うのと口をへの字にして泣き出す。ちょっと気に入らないことがあると泣く。左手に持っていたものを右手に持ち換えて口に入れる。歩行器に乗って後に少し動かせる。

M22 0;5(24) 手で足のつま先をにぎって遊ぶ。音のする方に興味があって、そっちの方をじっと見る。哺乳びんを持たすと自分で上手に飲む。においのあるものはべーとしてはき出す。お風呂で声を出したり笑ったりする。

R19 0;5(28) 歩行器で前の方に動くようになる。表情が豊かになる。1人になるとすぐ泣く。常に話しかけたりしないと機嫌が悪い。首がしっかりと抱くのも楽になる。ときどき「パパ」と聞えることばを発する。

以上の観察結果は、T式・E式の結果と合致する。

M23 0;6(0) 片手でおもちゃを動かし、もう一方の手でおもちゃをたたくようになり、両手でそれぞれ違った事をするようになる。

M24 0;6(6) 歩行器で前へどんどん進むようになる。

R24 0;6(11) 下歯がはえ始める。歩行器に乗って前にどんどん進むようになる。

M25 0;6(12) 自分の行きたいところへはだいたい行ける。おもちゃをぐるぐるまわして遊ぶようになる。

R21 0;6(26) 寝返えりをしようとするがまだできない。お姉ちゃんと時々声を出して遊んでいる。喜怒哀楽がある。目薬を1度さしたらきらった。次に目薬を持ってきて見せただけでいやいやをした。

M26 0;6(26) 1人でおすわりができる。人の顔をじっと見つめる。歩行器で自分の行きたい所へ自由に行ける。玄関に誰か来た時、電話が鳴ったときなどすぐ歩行器でとんでくる。

以上の観察結果は、いずれもT式・E式の結果と合致する。

M27 0;7(5) 手を取って立っさせると足を前に動かして歩く。手に渡したものは何んでも口に入れる。お風呂でも声を出して遊ぶ。

R22 0;7(6) 歩行器で部屋の端から端へ行ける。ときどき「パパ・パパ」と言う。1人にしていても泣かずに遊ぶようになる。

M28 0;7(10) 引戸をあけてその内のものを取り出す。寝るよりはお座わりの方が機嫌が良い。口をはっきりと明けて「タッタタッ」と声を発する。

R23 0;7(25) このころは這いたくて仕様がなく、這ってもほとんど後ずさりのため、前に進まないと言っては泣くが、少しは前に進む。歩行器で自由にあちこちに行ける。這っていて自分でお座りができる。自分の気に入ったものをお姉ちゃんに取られると怒って泣く。

M29 0;7(28) おむつを換える時に起きようとするのでなかなかおむつができず母親は必死の思いをする。ストーブの枠に手を支えて立ち、手の位置は自分で動かせる。スプーンで飲むよりコップで飲む方が好きになる。洗濯物を干す時は、手あたり次第にカゴから出してかんだりなめたりする。吊ってある物は何でも力強く引張る。Mちゃんと呼ぶと遠くにいても必ず顔を見せる。お座りより立ちたいみだいである。知らない人を見た時、遊んでいるものを取られた時は激しく泣く。

以上の観察結果は、いずれもT式・E式と合致する。

R24 0;8(1) 3歩ほど歩く。返事をしているように「アアー・ウー」と言う。お風呂でよく遊んで機嫌が良い。

R25 0;8(10) 自分が好きな所へ這って行ける。玄関の方へ行きたがって仕様がな。片手で支えて長いあいだ立っている。

R26 0;8(22) 食べ物は何んでも積極的に手でつかんで口に入れる。

M30 0;8(27) 体が自由に動かせるようになってじっとしていない。「電話はどこ？」と言うと電話の置いてある方を見る。自分の気に入らない事や気に入らないものを示すと泣いて怒ったりする。1つのおもちゃでも5分も遊んでおれずにすぐあきる。いっときもじっとしていないので目が離せない。こたつにつかまり1人で立つ。歩行器ではもの足りなさそうである。

以上の観察結果は、T式・E式の結果と合致する。

R27 0;9(1) 「Rちゃん」と呼ぶと遠くにいても必ず見る。

M31 0;9(10) 「ウンマ・ウンマ」とはっきりと言葉を発する。這って部屋の中を一回転する。気に入ったおもちゃを取られると泣いて求める。

M32 0;9(16) 「パ……パ」と間をおいて言う。部屋で1人きりになると少しの間、人をさがすがその内激しく泣いて求める。このところ離乳食を全々食べてくれずはじめて口をつぐむ。「クマちゃんはどこ？、デンワは？、テレビは？、トケイは？、おばあちゃん（写真）は？」と質問するとだいたいそれがあるところを見るようになった。這っている間、ときどき1人で座れる。「ナツ・ナツ・ナツ」とことばを発する。

R28 0;9(18) 「アー・アー、タツ・タツ・タツ」等ことばらしい声を発する。一緒に遊んでやると目を細くしていい顔をする。

R29 0;9(28) 「パパ、ママ」と言う。お姉ちゃんとよくおもちゃのとり合いをしてけんかをする。

R30 0;10(4) 「デンキは？」と言うと手を上げて上を見る。つたい歩きをする。

M33 0;10(12) 1人でテレビの前に立ったり、フスマにつかまり立ちをする。そして、上手に座る。這って台所まで来るようになった。しかも、スピードも早くなる。

M34 0;10(15) 好きなテレビ画面はミルクを飲むのも忘れてじっと見る（軽快な音楽・いろ

いろな色で移り変わるものなど）。

R31 0；10(18) 椅子に座り1人ではしを持ってお茶碗をならしたり、おかずをつついたりするし、自分ではしを持って口へ入れようとするがまだまだできない。ときどき1人立ちができる。自分1人で機嫌よく遊んでいる所へお姉ちゃんが割り込むと「キャッキャッ」と腹を立てて怒る。盛んに愛きょうをふりまく。電車が通っているのを見て「バイバイ」と手を振る。

M35 0；10(29) 「ママ」と呼んで這ってくる。テレビの上の物を取る。目をさましたら1人で這って起きてくる。「おはようございますは？」と言ったら上半身で礼をする。「こんにちはは？」も同様である。「バイバイは？」と言うと手を振る。

以上の観察結果はT式・E式と合致する。

R32 0；11(1) この頃、手に持った物をほうる事が多い。歩行器にのせると「出してくれ」と身を乗り上げて出ようとする。ねる時、お姉ちゃんとたわむれ、お姉ちゃんの顔をつついたり、マツゲを取ろうとしたりする。1人で立って歩こうとするが、まだタツ・タツ・タツ程度。「アー・アー」と声を出して指差す。

R33 0；11(3) 「早くねなさい」と叱ると、さっと頭を下げた寝るまねをする。食事は椅子に座り両手でつかんで食べる。左手にスプーン、右手でおかずを入れてスプーンで食べ様とする。本を自分でめくり見ようとする。1人で上手に歩行器に乗る。

M36 0；11(5) ステレオの上の物を取り始める。車の音がすると「ブー・ブー」と言って外に出たがる。コップにおもちゃを入れて「カラ・カラ」と音がするのを楽しむ。

M37 0；11(12) 「イヤ・イヤ」を1度教えたら、それからそればかりを言う。ウサギのカタカタのおもちゃで上手に道を歩くがまだ1人では歩けない。眠っている時、よく寝返りを打つ。特に右下にして寝る。

M38 0；11(21) 「ママのお肩をトントンしてちょうだい」と言うと言後にまわってトントンしてくれる。カレンダーを新しい月に変えようと、朝一番にその違いに気づき手で指差して「違う・違う」と言うような声を出す。その日、いつまでもその状態が続いた。「ゾウさんはどこ？」と言うと、象ののっている絵本を本棚に探しに行くが、まだその絵本まではわからない。

R34 0；11(26) 1歩2歩と1人で歩く。裏の庭へ1人で出たがる。お姉ちゃんと一緒にの事をよくし、ペンを持って紙や本に書く。また、足や手にペンで書く。くつ下を持ってきて自分の足にはこうとする。

M39 0；11(27) 1人立って手をパチパチとたたく。

以上の観察結果は、T式・E式の結果と合致する。

M40 1；0(0) 絵本が好きで長い間1人で見ている。ネコの絵を見て「ニヤ・ニヤ」と言い、「雨ふりお月さん」の絵の所は歌って欲しいと母親の方を見る。歌うと喜んで手をたたく。自分の好きなコマーシャルはじっとして見ていて手をたたいて喜ぶ。

R35 1；0(0) 2階へ行くのに階段を1人でさっさと登る。お姉ちゃんより早く歩けるようになり部屋の端から端まで歩くことができる。

M41 1；0(11) 階段を1人で上まであがる。

M42 1；0(18) もたれずに1人で立つことができるようになる。

M43 1；0(19) 3歩程1人で歩き始める。ネコの絵本を見て「ニヤン・ニヤン」と言う。ヤ

ギの絵を見て「マァー・マァー」と言う。「メー・メー」とは言えない。父親が朝出かける時は必ず「バイ・バイ」をする。この頃、夜寝返えりを非常によくうつ。

M44 1;0(28) 玄関からベッドまで(6 m程)を1人で歩く様になる。「お耳は? ポンポンは? 足は?」と言うと手で示すようになる。

以上の観察結果はT式・E式の結果と合致する。

R 36 1;1(1) 絵本を持ってきて、「むすんでひらいて」の所を開けて自分で、「むすんで…」と手たたく。部屋に落ちているものはごみと思うのかクズ入れに何んでも拾ってすてに行く。うどんやおかずをはしでつかんで食べれる。汁物もこぼしながらも自分で飲む。

R 37 1;1(8) 1人でクツをはいて外を歩ける(ときどき、こけるが……)。

M45 1;1(11) ねむたいときでも、おなかがすいたときでもまず自分の欲しい物を泣いてほしいと要求する(自分で取れないタンスの上の人形など)。

M46 1;1(26) しっかりと歩いて買物についてくるようになった。自分の欲しい物をくれないと座りこんで両足をパタパタさせてキー・キーと泣く。自分の思うようにならないとキーとかん高い声で要求する。本を見ては、テレビを見ては?、「ナニ?」を連発する。家の中のものはだいたい覚えており、聞くと指でさし示すことができる。

M47 1;2(16) 外へでている時、めずらしい物は「ナニ?、ナニ?」と指差して聞く。「ママにクリームを持って来て」と言うときちゃんと探して持ってくる。「ハーイ」と上手に返事ができる。近所の友達が遊びにくると、とても喜んで抱きついたりしてはしゃぐ。

M48 1;3(8) 牛乳がなくなると「もうない」と言う。お腹が一杯になると「もういらない」と言う。「パパ、ママ、キシヤ、ジー(ジュース)、ダリヤ、バ(バラ)、オワリ」など言うことができる。

R 38 1;4(9) 「ちり紙を持ってきて」と言うときだまって持ってきてくれる。「いくつ?」と言うとき人差し指をたてて「1」とする。外へブランコやすべり台に行く時、自分でさっさささと好きな所へ行く。お姉ちゃんがじゃまをするとワンワンと怒る。「パパ、ママ、ネンネ、ニャン・ニャン、ワンワン」が言える。両親の言うことは何でもわかる。食事は何でも自分で食べる。

M49 1;4(11) 喜怒哀楽が激しくなる。母親のお腹が大きいので、あまりかまっていられないので父親が帰ってくるとよく甘える。自分の名前を「M」とはっきり知るようになる。「パパは?、ママは?、Mは?」と聞くとはっきりと指差す。

M50 1;5(15) 妹が生まれて物めずらしそうに顔をほほずりをして、なかなか離れようとしない。ミルクを抱いてやっている母親の姿を見て、自分も同じようにして欲しいとせがみ2人を抱いてやる時もある。

M51 1;5(26) 夕食の準備をする時、茶わん類を運ぶのを手伝う。ステレオを1人でつけたり消したりして遊んでいる(押しボタン式)。TVをつけたり消したりはできない(同じく押しボタン式)。「哺乳ビンを持ってらっしゃい、好きな絵本を持ってらっしゃい、ニャン・ニャンの絵本を持ってらっしゃい」と言うとき持ってくるができる。また、「ドアを閉めて、マクラを持ってきて、プー・プー(おもちゃの自動車)に乗って、座って」などの指示に従える。さかんに走る。

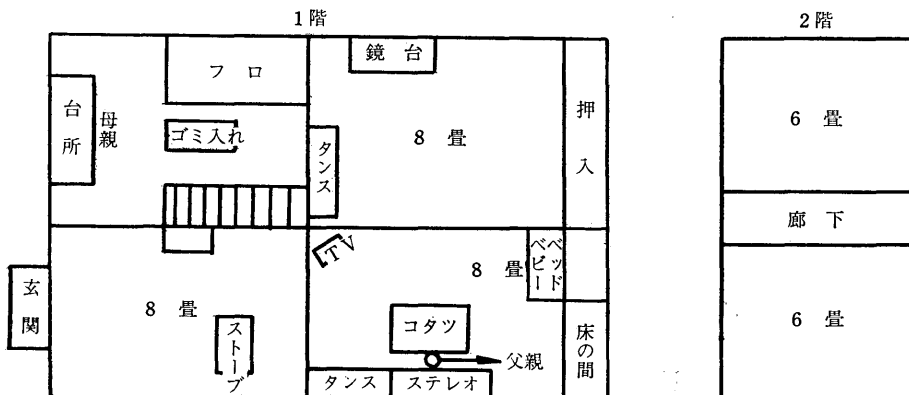
M52 1;6(17) 50音が1字1字後について元気よく言える。「おとうさん、おかあさん、わたしはMです」も1字ごと後について模倣できる。赤ちゃんが泣くとすぐ様子を見に行き、口づけ、ヨチヨチ（よしよし）をしている。

M53 1;6(18) 母親が怖い顔をして怒ると30秒ほどじっと顔を見ていて「ママ」と言ってヨチヨチをしにくる。つまり、機嫌を取りにくる。母親が怒ると反抗したあと助けを求めにくる。このころ、つま先で歩くようになる。ひざでも歩く。背をまげ両手を後にまわしておんぶのかっこうをする。ここ2日程、夜寝ないのでおんぶして寝かしつけるとき、この姿勢を取った。模倣と思われる。テレビの上のものを見ようとして、自分では見えない（身長81cm、テレビの高さ84cm）ため、父親を連れてきて座らせてひざの上に上ってのぞく。「ハーイ、パパ、ママ、ハイター（洗剤名）、ライター、チョウチョウ、コイ（鯉）」がわかる。はっきりと言える言葉は「メ（目）・テ（手）」である。

この頃、床の間に魚の鯉の絵を画いた掛軸をかけていた。そして、それが「コイ」であることは知っていた。ある日、父親がホームドラマを見ていて、Mはテレビの前で一生懸命遊んでいた。テレビは全然見ていなかった。そのドラマの中で「コイ（恋）」と言う単語が会話の中で出てきた。そうすると、無心に遊んでいたMが掛軸の方を後向きに指差して「コイ」と言って、また、無心に遊びつづけていた。

M54 1;6(22) ゴミを丸めてMに「ママ、ゴミ、ハイしなさい」と言うのと台所に走って行ってゴミ入れに自分で入れる。この事をメモにするために5分程前まで遊んでいた鏡台の前に昨夜赤いボールペンを置いてあるのを思い出し、「Mちゃん、カガミの前に赤いボールペンがあるから取ってきて」というと行きかけたが、テレビの前まで来た時、ちょうどCMが始まり立ったままそれを見ている。CMが終り、さらに今一度言うのと走って行って赤いボールペンを持って来た。これはPiagetの言う「対象の永続性（ゴミ箱・赤いボールペン）」と延滞模倣が完全にできていた事を示している。この時、母親は台所にいた。参考までに家の見取図を示しておく（下図参照）。

前を向いたまま椅子に座れる。これは「椅子」と言う「対象の永続性」がないと不可能である。眠くなると「チイ ッチ、チイ ッチ、カイカイ（かゆい）、メ・メ（目）」を連発する。



M55 1;7(2) 「S・Mちゃん」とフルネームを言うと「ハイ」と返事ができる。「まくらを持って来て、戸を閉めてきて、チリシを持ってきて、新聞を持ってきて」と言うとなぐ走って行って持って来てくれる。下着（上シャツ）の中に、まず頭を入れることができる。御飯の時間がきて自分が食べたいとなると椅子を持ってきて座って食べる。

R39 1;7(6) 便器に乗っておしっこをする。1週間程で覚えたのちおむつを取っていても夜もおねしょをしない。クツも1人ではいて外で元気に遊ぶ。「くつ下、ない、ある、どうぞ」が言える。また、「あかん、チーズ」が言える。近所の子がよく遊びにきてけんかをしながらもよく遊ぶ。

M56 1;7(9) 寝ころんでいると、何か取ってもらいたい時、そばにきて「タッチ」と言って服をひっぱる。父親が座っていても何かして欲しい時、「タッチ」と言って服をひっぱる。

M57 1;7(12) 夕方、腕時計を要求するのではなくて手にはめてやった。しばらく遊んでいた。大分たってからフト気がついてあたりを探したがないので、「ウデドケイは？」と問うと、ちょっと考える様子をしていたが、台所に走って行った。後をつけると開けてあった食器棚の中から「ハイ」と言って渡してくれた。「対象の永続性」が完全にできているものと思われる。柱時計と腕時計の区別は理解している。

M58 1;7(15) 「テレビを消して」と言うとなぐしてくれる。お風呂では石けんを手につけて自分の身体を洗おうとする。「あっち・こっち」が理解できる。自分の欲しい物があったら「あった」と言う。寝言で「ママ」と言う。手を上げて「グ」と言う。

M59 1;7(18) 父親が「タバコを持ってきて」と言うとなぐ、灰皿とタバコとパイプとライターの4つを自分で探して持ってきて「ハイ・ドーズ」と言って渡してくれる。おもちゃは何んでもこわしてみたく、特にネジを取ったりはめたりするのが好きである。コーヒー、クリープ、ハイター、クリームの瓶を開けたり閉めたりする。あまり妹を可愛いがると、物をほったり投げたりする。時には父親や母親の顔をたたたく。眠くなると「ウマ・ウマ」と言ってオンブをせがむ。自分の気に入った遊びがあると長い間それに熱中している。

M60 1;7(28) 夕刊を読んでいると自分も新聞を持ってきて、新聞を見ながら自分の知っている言葉をくりかえし言っている。コタツに座っていてヘアブラシが必要になり「ブラシを取って」と言うとなぐ取ってくれた。その時「チョット」考えていたが台所に走っていった。何をしているのかと待っていると、もう一つのブラシを持ってきた。母親に聞くと風呂場近くのワゴンの上にずうっと置いていたとのことである。何時か遊んでいる時に見かけていたのであろう。「対象の永続性」ができて初めて命令の遂行が可能になるのではないだろうか。

M60 1;7(28) ここ1週間程「ウマ・ウマ（馬）」と言って「お馬の親子」の歌を歌うようさかんに要求する。「雪やこんこん」・「森の小人」も欲求する。歌ってほしいときは、「ウマ」・「モリ」・「ユキ」と言って自分でページを開く。「ウマの絵本を持っておいで」と言うとなぐ持ってくる。寝る前に1人でさかんにおしゃべりをして寝る。その内容を聞いていると自分が知ったことばを復習している感じがする。

M61 1;7(29) 1, (2), 3, 4, 5, (6), 7, 8, (9), 10, が復唱できる。()内の数字はうまく言えない。グー・パーはできていたが、ここ2～3日でチョキが上手にできるようになった。

M62 1;8(0) 自分の事を「マミ」とはっきりと言えるようになった。今までは「マイ」と言っていた。妹に自分で哺乳ビンを持ってミルクを飲ませる。また、妹の口にミルクがついているとガーゼでふいてやる。部屋の中にある椅子(高さ40cm)に自分1人で上がる。まくらをして寝るようになる。

父親の休み中ずうっと一緒に遊んでもらい、夜は寝る前に物語の本(一寸法師)を読んだり歌(ちょうちょ、森の小人、むすんでひらいて、とおoryんせ etc,)を歌ってもらったりした。母親がRの育児に追われてなかなか相手をしてやれなかったせいもあり、すっかりパパっ子になって、トイレまで「パパ、パパ」とついてくる。

M63 1;8(1) 夕方6時30分のニュース・コープで「1兆円減税」のテロップがでると、テレビ画面のその「1」を指で押えて「イチ」と言う。3~4日前からカレンダーに興味を持ったので、カレンダーの数字を指さしながら1~10までの読み方は2~3回教えていた。

「ネンネ」と言う意味を「寝る」と言う意味と「横になる」と言う2つの意味で使っているみたいである。例えば、夜寝かしつける時に「さあー、ねんね」と言うとき自分で「ネンネ」を連発して横になる。一方、自分の横に横になって欲しい時、そこを手でたたいて「ネンネ」と言って横になるよう要求する。さらに、テレビの画面の中で横になっている人を見ると「ネンネ」と言って指さす。

M64 1;8(5) テレビの音を大きくしたり小さくしたり自由に調節できるようになる。今までは音量を大きくする(右にまわす)はできていたが、音量を小さくする(左にまわす)はできなかった。

この頃は、朝は10~11時頃に起き、午睡は3~4時頃、夜は遅くなってから元気になって12時すぎにやっと寝る。妹が起きている間は絶対に寝ない。母親が育児で疲れているため、父親が主にオンブして長い時は1時間以上も子守歌を歌って寝かしつける日が続いた。

M65 1;8(25) 午睡を1時頃にし、夜は9時にふとんに寝かすようにする。始めは泣いたり起きたりして「ママ・ママ」と甘えて呼ぶがその内1人で寝るようになった。キューピーさんを抱っこして……。つまり、1人寝ができるようになった。「おばちゃん」がはっきりと言えるようになる。色に興味を持つようになり、「アカ(赤)」と言え、黄色と黒色との弁別ができるようになる。

M66 1;8(28) 新聞とテレビの画面にでる字で「の」と漢字の「終」の意味がわかる。自分の欲しい物、また、見たいものがあっても背が届かない場合は椅子を使うことを覚える。

M67 1;9(1) オムツを取る練習をしていたが、この日初めて便器でおしっこをする。

M68 1;9(13) 自分の欲しい物が見つかったと「アッタ・アッタ」と言って喜ぶ。新聞や本を開けて盛んに言葉を並べてしゃべる。

M69 1;9(25) ひらがなの「の・つ・め」が読める。

M70 1;11(0) おもちゃをガラガラと鳴らして妹の相手をしてよく遊んでくれる。自分で「マミちゃんごはん食べたい」と言える。「パパの名前は?」「ママの名前は?」「妹の名前は?」と聞くとはっきりと名前を言う。クツを自分で上手にはける。クツ下もはける。外を歩く時

は自分でさっさささと走って歩く。ファスナー、ホックを開けたり閉めたりするのに興味を持って熱中して遊ぶ。

M71 1；11(8) 絵本を持っていて「それ反対よ」と言うを持ち換える。おふろ「湯つぼ」に1人で入れるし、また、1人で出れる。

M72 1；11(13) 「マミちゃんのお金ないの」と買い物につれていった時に言う。時々、自分から「オンッコ」と言ってくれるようになる。

M73 1；11(17) アメ玉の紙をちゃぶ台の上に置いたところそれを見ていて、それを持って台所へ行きゴミ箱に捨てようとしたが、丁度その時、台所にゴミかごがなかったので、ひきかえしてきて鏡台の下奥にあった小さなゴミかごを引っ張り出してその中に捨てた。「ゴミかご」と言う「対象の永続性」が完全に成されてはいなかったら、このような一連の行動はできないであろう。

M74 1；11(26) イチゴが好きで1度お風呂あがりにやったら、何時も風呂あがりに催促する。どれだけでも食べて最後の汁まで飲んで「おいしかった」と必ず言い、そして皿を台所の洗い場に持って行ってくれる。寝る時はパンツをはきかえ、パジャマも1人で着るようになる。

M75 2；0(12) 風邪をひいて2週間程調子が悪かった。今まで「ワメカ」と言っていたのが「ワカメ」と言えるようになる。

M76 2；1(10) おはしを持って御飯をすくうようになった。テレビをこちらの言う通りに声を小さくしたり大きくしたり自由にできる。ブランコに乗ると非常に喜ぶ。

M77 2；1(25) 絵本を持って来て、しきりに「パパ読んで……」・「ママ読んで……」と催促する。

R 40 2；2(2) 「2階に行ってタバコを取ってきて」と言うと、ライターとタバコを持っておりてくる。ライターとタバコは2階の机の上に置いてあったが、「対象の永続性」が形成されていないと、この一連の行動はできないであろう。

M78 2；2(9) 朝、着る服は「ブドウとリンゴとイチゴ」の絵を描いてある服を好み、自分でこれを着ると言って離さない。父親が夕方、5日程自転車にせて散歩に連れて行ったところ、その時間がくると連れていけと催促する。「今日は用事があるといけない」と言うと泣いてせがむ。

R 41 2；4(3) 仕事から帰って服をきがえた後タバコを吸おうとして2階のコートに入っているのに気が付いた。そこで、2階のコートのポケットに入っているタバコを取ってくるように言うと、2階に上っていったが、「ナイヨ」と言うておりてきた。「コート・ポケット」と言う概念がまだわかっていない。また、「コート」と言う「対象の永続性」がまだ形成されていない。M(3；9(18))に同じことを言うと2階に上って取ってきた。

M79 2；4(3) 服のぼたんのつけはずしをするのが好きで、寝る前など1人で何着も無心にはめたりはずしたりしている。手先が器用である。また、服を色々とぬいだり着たりして楽しむ。

M80 2；4(18) クツとクツ下を自分でちゃんとはく。赤・白・黄・緑・青・黒色の弁別がつく。

M81 2；5(11) デパートへ行きエスカレーター、エレベーターに乗るのを非常に喜び、おとなしくショッピングについてくる。スベリ台・ブランコにこわがらずに乗る。紙に丸や点線など

書く事が好きである。テレビをつけたり消したりするのは自分でしないと承知しない。

R 42 2;6(7) タバコを吸おうとタバコに手を伸すと、それを見ていて「Rがとる、Rがとる」と言ってタバコの箱を取り上げ、1本ぬき出して差し出し、ついでライターも差し出した。「買った」と言って、その日デパートで買った絵本を持ってくる。

M 82 2;6(11) 紙を持ってきて「パパの顔・ママの顔を画いてくれ」とせがむ。そして、ひらがなを書けとせがむ。テレビの「減点パパ」が好きでその影響のようである。ひらがなの「の・ま・み」を新聞をみてわかる。1～10、A～Zまではっきりと言える。歌は10曲ほど1人で歌える。母親の姉と電話でだいたい話せる。「まみちゃんよ。元気よ。おばちゃんこんにちは。さよようなら。またねー」と言う。

R 43 2;6(11) 2階から父親のパジャマのズボンをはいておりて来て「見て」と言って笑わせる。ダブダブのため脱げると「着せて」と要求する。RはMにくらべ無口な方であるが、愛きょうがあって自分で色々と遊びを工夫する。

R 44 2;6(12) ミルクを飲んでいて父親のズボンの上にこぼした。すると、近くにあったタオルでサッサッとふく。カラの目薬を持ってきて「お姉ちゃんがこうして出したのよ」と言って目薬のカラをさかさまにして押して見せる。ハサミで紙を切る時、同時に口をパクパクさせている。ハサミが欲しいと言うので小さいハサミを渡すと、「大きいハサミがあったでしょう」と言う。「ない」と言う。「あそこにあったでしょう」と言って指さす。

M 83 2;6(23) 自分1人でだいたい下着・上着（セーター等）・くつ下・くつをはく。日に何度も服を着替えたがる。おもちゃを沢山持ってきてバケツに入れ、ぐるぐるかきまわして「お料理してるの」と言って母親の料理している通りにまねをする。この頃、甘えになってきて妹のRと同じことをしないとすねる。服も母親の決めたのを着ず、自分の好きなものを着ると言うことをきかなくなる。

MもRも2才6ヶ月頃から第1反抗期に入り、母親や父親の言う事に反抗するようになった。また、外で遊ぶ事が多くなり観察が困難となってきた。このため、MとRの自我の芽生えと考え、また、本研究の一応の目的を果たしたので観察・記録は中止することにした。夫婦の話題がその日の子どもの1日の行動についてである事には変わりはない。

Ⅳ 結論と要約

幼児期の言語形成において、視覚・聴覚をはじめとする諸感覚が重要な役割を担っているという仮説のもとに一連の研究を行ってきた。

今までの研究では、中学生普通児・盲児・弱視児・ろう児、小学生普通児・盲児・ろう児にSD法を適用して、視覚・聴覚・触覚・嗅覚・内部（内臓）感覚が、言語形成の初期において重要な役割を担っていることを明らかにした。

また、身体運動感覚が特に動詞の習得において重要な役割を果たしていることも明らかにした。従って、本研究では今までの研究を発達的・臨床的に証左することを目的とした。

このため、2女兒の出生時から2才6ヶ月までを観察・記録した。なお、前回の研究との関連

から、動詞の習得に重点をおいて観察・記録した。この結果、動詞の習得は「対象の永続性」がなされて始めて動詞の学習が可能となることが明らかとなった。例えば、「ドアを閉めなさい」という指示に対しても、「ドア」と言う概念が学習されていて始めて「閉める」と言う行為も成功するわけである。この行為ひとつを取ってみても、「聞く（聴覚的行為）」、「見る（視覚的行為）」、「歩く（身体運動感覚的行為）」、「手で閉める（身体運動感覚的行為）」など一連の感覚的行為が複合した結果なのである。

幼児期の言語形成において各感覚の成熟は無視できないものがある。もちろん、筆者らの従来の研究において、盲児・ろう児でも豊富な言語を学習していることが明らかとなっている。しかし、もしいずれかの感覚が欠損している場合、言語形成に大きな影響を与えることは明白である。幼児は感覚の成熟にともなって言語も豊かに発達してゆくように思われる。

引用文献

- 遠城寺宗徳, 1977, 遠城寺式・乳幼児分析の発達検査法（九大小児科改訂版）。慶応通信
 Geschwind, N. 1965 a. Disconnexion syndromes in animals and man. *Brain*, 88, 237—294.
 Geschwind, N. 1965 b. Disconnexion syndromes in animals and man. *Brain*, 88, 585—644.
 星野喜久三, 1970, 感情語の意味判断に関する集団間比較, *心研*, 41, 265—272.
 Osgood, C. E. 1962. Studies on the generality of affective meaning systems. *Amer. Psychologist*, 17, 10—28.
 Scott, R., and Sattel. L. 1972. Perception and language: A german replication of the Piaget-Inhelder position. *J. Genet.*, 120, 203—210.
 須田洋行・苧阪良二, 1970, 視覚体制化の言語発達における役割, *日本教育心理学会発表論文集*, 370—371.
 須田洋行, 1975, 感覚の言語形成における役割(Ⅰ), *京都大学教育学部紀要*, 21, 146—153.
 須田洋行・一谷彊・苧阪良二, 1979, 感覚の言語形成における役割(Ⅱ), *京都教育大学紀要*, 55, 23—44.
 須田洋行・一谷彊, 1980, 感覚の言語形成における役割(Ⅲ), *京都教育大学紀要*, 56, 17—37.
 津守真・稲毛教子, 1961, 乳幼児精神発達診断法, 0才～3才まで, 大日本図書。

参考文献

- Bower, T. G. R. 1974, *Development In Infancy*. 岡本夏木他（訳）, 1979, 乳児の世界。ミネルヴァ書房。
 Bruner, J. S. 1968. *Processes of Cognitive Growth: Infancy*. 平光昭久（訳）, 1971, 幼児の認知成長過程, 黎明書房。
 Holt, K. S. 1975, *Movement and Child Development*. 成瀬悟策（訳編）, 1978, 児童発達の動作学, 誠信書房。
 キスチャコフスカヤ, 1970, 坂本市郎（訳）, 1972, 0歳児の運動の発達, 新読書社。
 Piaget, J. 1948. *La naissance de L'intelligence chez l'enfant*. 2^{ed}. 谷村覚・浜田寿美男（訳）, 1978, 知能の誕生, ミネルヴァ書房。

Piaget, J. 1964, SIX ÉTUDES DE PSYCHOLOGIE. 滝沢武久（訳）, 1968, 思考の心理学, みすず書房。

Piaget, J. LA FORMATION DU SYMBOLE CHEZ L'ENFANT. 大伴茂（訳）, 1967, 遊びの心理学, 黎明書房。

Summary

The present study was designed to examine the role of sensory systems on language formation in young children.

These results suggest that visceral perception, auditory perception, visual perception, and tactual perception give significant effects to language formation in young children. Body movements therefore give significant effects to the language formation of verbs in young children.

We designed the observation of two babies development (0~2; 6 years). These results suggest that object conservation is very important in object performance.